

# 「初期キリスト教」における マタイ福音書の「受容」について ——イグナティオスの手紙から<sup>1</sup>——

澤村 雅史

(2021年10月12日 受理)

The 'Reception' of Matthew's Gospel in 'Early Christianity':  
In the Case of the Epistles of Ignatius

Masashi SAWAMURA

## Abstract

The influence of Matthew's Gospel over Ignatius of Antioch has attracted great scholarly attention and numerous studies have investigated their relationship and reached vastly diverse conclusions.

This article attempts to find the literary contact between Matthew's Gospel and the Epistles of Ignatius through the exegetical analysis of nine instances from Ignatian epistles, and argue about the pattern and theological characteristics of Ignatian 'reference' of Matthean Gospel.

**Keywords:** The Letters of Ignatius イグナティオスの手紙, The Gospel of Matthew マタイによる福音書, Early Christianity 初期キリスト教, Apostolic Fathers 使徒教父, Reception History 受容史

## 1. 問題の所在と研究の方法

すでにわれわれは、マタイ福音書について、その執筆意図と自己理解を問うことを通して、同福音書の基本的性格が、律法重視の諸民族宣教によって神の国の再編をすすめるという、「ユ

<sup>1</sup> 本研究はJSPS 科研費17K02240の助成を受けている。本稿は日本聖書学研究所2021年3月例会での口頭発表をもとに当日の質疑応答を踏まえてその前半部分を論文に書き改めたものである。発表内容の後半部分（本論文の結論であるイグナティオスのマタイ参照が示す神学的傾向について、歴史的・社会的背景をもとに考察したもの）については、学術誌に投稿し、査読を受ける段階にある。

ダヤ教」の枠内にあることを論じた<sup>2</sup>。

この、マタイ福音書がなお「ユダヤ教」の枠内にあるという議論からは、それではマタイ福音書は、いつ、どのようにしてキリスト教文書と見なされるようになったのか、という疑問が生ずる。マタイ福音書を担った運動自体は「キリスト者ユダヤ教」(Christian Judaism)あるいは「ユダヤ的キリスト教」(Jewish Christianity)として周縁化され、やがて歴史の上からは消滅していったのであるが、その一方で、その福音書はなぜ、どのようにして、キリスト教の中心的教義を担う文書と見なされるようになり、ついには、新約聖書正典の冒頭を飾るに至ったのか。この疑問に答えようとする営みは、キリスト教文書としてのマタイ福音書の起源を解明することを超えて、「キリスト教」自体の起源や形成のプロセスに接近することにつながると見通される。

本研究を含む一連の研究では、この課題について、いわゆる使徒教父文書におけるマタイ福音書の受容の傾向に着目し、分析することを通じて、「初期キリスト教」におけるマタイ福音書の位置づけについての動態を把握することを試みる。中でも、本研究では特に、マタイ福音書との親和性がしばしば語られるイグナティオスの手紙において、同福音書との並行が見られる箇所の特徴や傾向を調べ、釈義的検討を加えることによって、両文書間の関係を明らかにすることを試みたい。

本研究では初めに、使徒教父文書におけるマタイ福音書に関連する箇所を、いくつかの先行研究を比較しつつ特定することから手掛けたい。また、この作業を通じて、使徒教父文書の中でもとりわけイグナティオスの手紙に着目することの意義を論ずることとする。次に、イグナティオスの手紙とマタイ福音書の関連箇所を釈義的に比較することによって、イグナティオスの意図に接近することを試みる。

## 2. 使徒教父文書とマタイ福音書の関係についての研究史

使徒教父文書を含む初期キリスト教諸文書とマタイ福音書の関係についての網羅的な研究としては、その代表として Édouard Massaux によるものが挙げられる<sup>3</sup>。1950年にフランス語で出版された著作には、第一クレメンスからエイレナイオス以前までの広範な初期キリスト教関連諸文書（外典、偽典、アグラファ、一部のグノーシス文書を含む）においてマタイ福音書に

<sup>2</sup> 澤村雅史『福音書記者マタイの正体：その執筆意図と自己理解』日本キリスト教団出版局、2016年。

<sup>3</sup> Édouard Massaux, *The Influence of the Gospel of Saint Matthew on Christian Literature Before Saint Irenaeus*, trans. by Norman J. Belval and Suzanne Hecht; ed., Arthur J. Bellinzoni, 3 vols. (Macon, GA: Mercer University, 1990–1993).

関連すると考えられる箇所が挙げられ、他の新約諸文書の影響とも比較検討する形でマタイ福音書の影響が検証されている。Massaux は 1 世紀末または 2 世紀はじめにはすでにマタイ福音書がキリスト教世界において広く知られ用いられており、時を追うにつれその影響力が増し、ついには初期キリスト教における最大の影響力をもつようになったと考えた。

この Massaux の議論は、その発端を 1905 年の A Committee of the Oxford Society of Historical Theology による使徒教父文書と新約聖書の関連についての研究に求めることができる<sup>4</sup>。それまでおおむね使徒教父文書内のイエス伝承は、福音書に由来するということは疑われることがなかったが、この研究は使徒教父文書と福音書との関連を直接引用、言及、記憶に基づく不完全な引用、そして引用と認められないものに区別した。その結果、疑いなく文献的引用と断定できる箇所は一つもないとの結論が導き出された。Massaux はこの研究と多くの視点を共有しつつ、福音書がすでに成立した使徒教父時代における福音書の影響を口頭伝承に還元することの合理性を疑問視し、福音書との直接的関係の立証が困難な場合に口頭伝承を想定するという立場をとった。その後 Massaux に対しては、ことがらを単純化しすぎており、また、マタイ福音書の影響を無批判に前提としているなどの批判が加えられてきた<sup>5</sup>。

一方、Helmut Köster<sup>6</sup>は、やはり Oxford Committee の研究と対話しつつ、Massaux とは独立して、使徒教父は福音書を参照しているのではなく、総じて福音書と共通の口頭伝承に拠っていると論じた。Köster は、使徒教父の時代に福音書がまだ正典的な権威をもつに至っていなかったと指摘し、様式史や編集史の視点から、使徒教父の時代になお生き残っていた口頭伝承が、ちょうど福音書として文書化されたのと同様のプロセスにおいて使徒教父文書に組み入れられたと論じており、その根拠の一つとして 1Clem. 13:1-1 や 46:7-8 等でイエスの言葉が導入定式を伴っていることを挙げている<sup>7</sup>。

これに対し、Wolf-Dieter Köhler<sup>8</sup>は、Massaux の著作の時代にはまだ刊行に至っていなかったナグ・ハマディ文書等も視野に収めながら、Massaux と同様に個々の箇所を検証しつつ、マタイ福音書が比較的早期に広く知られていたという説をとり、結果的に福音書と使徒教父文書

<sup>4</sup> A Committee of the Oxford Society of Historical Theology, *New Testament in the Apostolic Fathers* (Oxford: Clarendon, 1905).

<sup>5</sup> cf. Stephen E. Young, *Jesus Tradition in the Apostolic Fathers: Their Explicit Appeals to the Words of Jesus in Light of Orality Studies*, WUNT 311 (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2011), 39-45.

<sup>6</sup> Helmut Köster, *Synoptische Überlieferung den apostolischen Vätern*, TU65 (Berlin: Akademie, 1957).

<sup>7</sup> Young, *Jesus Tradition*, 45-46.

<sup>8</sup> Wolf-Dieter Köhler, *Die Rezeption des Matthäusevangeliums in der Zeit vor Irenäus*, WUNT 2/24 (Tübingen: Mohr-Siebeck, 1987).

の関係については、Massauxに近い立場をとっている<sup>9</sup>。Köhlerは、Massauxの立場とKösterの立場という両極端<sup>10</sup>の間で膠着状態に陥っていた研究状況を進展させるため、引用の明示の有無、表現や単語の類似性および思想や内容の類似性の程度など、判断基準（criteria）の明確化と一貫した適用を試みた<sup>11</sup>。

使徒教父文書全体における新約諸文書参照を扱う試みとしては他に、Biblia Patristicaが知られている。このインデックスは、CADP（Centre d'analyse et de documentation patristiques; Centre for Patristics Analysis and Documentation）が1965年以降、取り組んだ研究の成果であり、古代のキリスト教諸文書における聖書引用ならびに言及を網羅的にリスト化する試みとして、1975年から2000年にかけて全7巻が刊行された（このうち第1巻が新約聖書外典からアレクサンドリアのクレメンスおよびテルトゥリアヌスまでを範囲としており、目下の我々の研究の関心の対象となる<sup>12</sup>）。全部で27万箇所にも及ぶという引照は、すべて科学的な裏付けに基づくといわれているものの、個々の箇所を引用や言及と判定した基準や検討内容については公開されていない<sup>13</sup>。

この研究の後継として、1999年以降、Biblia Patristicaに含まれなかった研究成果も加えたデータベース化が行われ、Web上でのオペレーションを可能としたBiblindexと名付けられた検索システムとしてベータ版が2006年から2009年にわたって公開されることとなった。現在ではさ

<sup>9</sup> U. Luz もまた、いくつかの箇所を例示しつつ Köster よりも Massaux に同意することの根拠を述べている（U. Luz, *Matthew 1-7: A Commentary* (Revised), trans. by J. E. Crouch (Minneapolis: Fortress, 2007), 58（日本語版は U. ルツ『マタイによる福音書（1-16章）』EKK 新約聖書註解 I/1, 小河陽訳, 教文館, 1990年, 96-97頁）。Graham N. Stanton, “The Early Reception of Matthew’s Gospel: New Evidence from Papyri?,” in *The Gospel of Matthew in Current Study*, ed. David E. Aune (Grand Rapids: Eerdmans, 2001), 42-61は断片ノートという可能性によって Massaux 説と Köster 説の架橋を試みている。

<sup>10</sup> Köhler はアプローチの精確性については Köster に理があるとする一方で、編集史的方法是引用を見出すことについては有効であるが、引用を否定するための方法論として援用することはできないと指摘している（cf. Young, *Jesus Tradition*, 51）。Paul Foster, “The Epistles of Ignatius of Antioch and the Writings that later formed the New Testament,” in *The Reception of the New Testament in the Apostolic Fathers*, eds. Andrew F. Gregory and Christopher M. Tuckett (Oxford University Press, 2005), 160-86（esp. 173-81）も Köster の判断基準を一貫的に適用することは厳しすぎると述べ、箇所ごとの評価の必要性を主張している。Foster は4組の箇所（Ign. *Smyrn.* 1:1 / Matt 3:15; Ign. *Trall.* 11:1 and Ign. *Phld.* 3:1 / Matt 15:13; Ign. *Pol.* 2:2 / Matt 10:16b; Ign. *Smyrn.* 6:1 / Matt 19:12d）を取り上げて検証したうえで、結論としては Ign. *Smyrn.* 1:1 が Matt 3:15 を参照していることに限っては確実であるとし、少なくともイグナティオスはこの箇所のマタイ（福音書に編まれる前の）資料を知っていたことまでは認めることができるとしている。他の箇所については単独でマタイ参照を立証できる要素は十分ではないとしながら、証拠として積み上げることでイグナティオスのマタイ福音書への文献依存を論じる余地があると述べている。

<sup>11</sup> Köhler, *Rezeption*, 5, 7-11.

<sup>12</sup> J. Allenbach et al. eds., *Biblia patristica: index des citations et allusions bibliques dans la littérature patristique*, vol. 1 (Paris: Editions du Centre national de la recherche scientifique, 1975).

<sup>13</sup> 序文には、CADP が1967年に刊行した Booklet に判断基準が示されているとのみ記されている。

らなる改良を加えられて公開が継続している<sup>14</sup>。

本研究では以下に、Massaux と Köhler（および補助的に Biblindex）を手がかりとしつつ批判的に対話を行うことを通して、使徒教父文書におけるマタイ福音書の影響<sup>15</sup>について発見ならびに検証を試みたい<sup>16</sup>。

### 3. 使徒教父文書におけるマタイ福音書関連箇所が発見：分類と判断基準について

前述の先行研究のうち、Massaux は教父文書におけるマタイ福音書の影響を、いくつかのカテゴリに分けつつ、その根拠を論じている。

英訳版第1巻の第1章で扱われる第一クレメンスについては、山上の説教由来について確度が高いと Massaux が判断した箇所と、その他の箇所に分けて扱われており、他の福音書との比較対照においてマタイ福音書参照の蓋然性が論じられている。それに加え、確度が低い (doubtful) あるいは除外されるべき (to be dismissed) 箇所が扱われ、最後に他の新約諸文書 (the writings of Luke, the Johannine Literature, the Catholic epistles, the epistles of Saint Paul) の参照や影響が検討の俎上に載せられている。なお、英訳版では章末に編集者である Bellinzoni による追補 (addendum) が置かれ、Köhler ならびに *Biblia Patristica* の判断が一覧表の形で掲載されている。

<sup>14</sup> 以上の経緯は Laurence Mellerin, "Background: From *Biblia Patristica* to Biblindex," *BIBLINDEX: research notebook*, 31<sup>st</sup> July 2011, <https://biblindex-en.hypotheses.org/22>による。

<sup>15</sup> なお、この影響 (influence) をどのように呼ぶかということについて、本研究の元となった日本聖書学研究所2021年3月例会の発表時点では筆者は不用意に「引用」(quotation) という語を用いて説明を試みたが、質疑応答の場において、「引用」とは対象となる文献間の関係が直接に明示されている場合に限られるのではないか、という指摘を受けた。指摘に感謝しつつ、本稿ではイグナティオスの手紙のマタイ福音書への直接的な文献的依存を想定する立場は保ちつつ、逐語的な対応や文中における引用の明示 (たとえば導入定式) が見られない場合には「参照」(reference) と改めた。この問題については欧米の研究者間でも定義の揺れがもたらす用語の混乱があることが Andrew F. Gregory and Christopher M. Tuckett, "Reflections on Method: What constitutes the Use of the Writings that later formed the New Testament in the Apostolic Fathers?," in *The Reception of the New Testament in the Apostolic Fathers*, 61–82 (esp. 63–66) によって指摘されている。

<sup>16</sup> 山田耕太「イグナティオス書簡におけるマタイ伝承」(『敬和学園大学研究紀要』創刊号, 1992年, 1–20頁) はイグナティオスのマタイ参照が口頭伝承に由来するものか、または文献としてすでに成立したマタイ福音書によるものかを見極めるにあたり、様式史や編集史の成果を批判的に検証するための視点として社会心理学的な「噂の研究」における平均化、協調、同化という視点を取り入れることで議論を進めることを試み、「イグナティオスがマタイ伝承の口頭伝承によるというよりも、文書化されたマタイによる福音書を読んだ上で記憶を再現している可能性が高い」(13頁) と結論付けている。これは同論文でも言及されている青野太潮「使徒教父」(荒井献〔編〕『新約聖書正典の成立』日本基督教団出版局, 1988年, 55–85頁), 75頁による観察(「ローマへの護送中という彼の具体的な状況を考慮すれば、暗記していたものからの引用、という方が事態に即しているように思われる」)とも一致している。

第2章で扱われているバルナバの手紙については、山上の説教に加え、受難物語に由来するとのカテゴリが設けられている以外は第一クレメンスと同様の手順で扱われている。

イグナティオスの手紙は第3章で扱われ、山上の説教とそれ以外の箇所という組み立ては同様であるものの、確度が高い (Certain)、やや高い (Probable)、低い (Doubtful)、極めて低い (to be Excluded) という区分が導入されている。第2巻の第1章で扱われる第二クレメンス以降でも、同様の区分が行われている。なお、ディダケーについては最終巻 (第3巻) の最後に扱われているが (その理由については第1巻冒頭に詳述されている)、確度の検討については確実と思われるものと疑わしいもの (Doubtful) という単純な区分となっている。

以上の区分は、多くの場合、箇所ごとに詳しい検証が加えられてはいるが、Köhler が指摘するように、一貫した判断基準が示されているわけではない。

Köhler もまた、前述のように判断の蓋然性を基準に照らして段階に分け、その根拠を論じている。主な区分は、やや確実 (Probable)、可能性が高い (Quite Possible)、仮定として可能 (Theoretically Possible)、可能性は低い (improbable)、可能性は極めて低い (to be Excluded) などであり、場合によって各々の中間的な判断も行われることがある。

Biblia Patristica ならびに Biblindex については前述のとおり、個別の箇所について検証するための情報が提供されていない。

#### 4. イグナティオスの手紙におけるマタイ福音書関連箇所の検証ならびに釈義

さて、本研究では使徒教父文書とマタイ福音書の関係を論ずるにあたり、さしあたってはイグナティオスの手紙に焦点を合わせたい。

その理由は、一連のイグナティオスの手紙はその成立年代や場所が比較的明らかであること、マタイ福音書との関連について多く論じられてきていること、「反ユダヤ教」的な叙述が見られ、本研究を含む一連の研究の中心的な関心の一つである「キリスト教の起源」に深くかかわると見通されること、などである。

手始めに、Massaux, Köhler, Biblia Patristica, Biblindex のそれぞれが、イグナティオスの手紙におけるマタイの影響をどのように観察しているかを一覧表としたものが別表 (「19頁、イグナティオスによるマタイ参照箇所一覧」) である。

Massaux がマタイ参照と判断している箇所の中で、Köhler も自身の分類の中では最も確度が高いとしている (Probable) のは Ign. *Phld.* 3:1 (Mt. 15:13) と Ign. *Smyrn.* 1:1 (Matt 3:15) の2箇所のみであるが、Biblia Patristica (以下 BP) と Biblindex もこの判断を支持している。

次に、Massaux が確実とみなす箇所のうち、Köhler がやや確度が劣る (Quite Possible) と



するのは, Ign. *Phld.* 2:2 (Matt 7:15); Ign. *Eph.* 5:2 (Matt 18:19–20); Ign. *Pol.* 1:2–3 (Matt 8:17); 2:2 (Matt 10:16) の4箇所であるが, このうち Ign. *Pol.* 1:2–3 (Matt 8:17) はBPのリストには挙げられておらず, Biblindex も挙げていない (Biblindex はこの他にも Ign. *Phld.* 2:2 (Matt 7:15) を除外している)。

Massaux がやや確実 (Probable) とし Köhler がやや確度が劣る (Quite Possible) とするのは, Ign. *Eph.* 17:1 (Matt 26:6–13); Ign. *Phld.* 6:1 (Matt 23:27); Ign. *Smyrn.* 6:1 (Matt 19:12) の3箇所である。

逆に, Massaux は挙げておらず Köhler がやや確度が劣る (Quite Possible) と見なすのは Ign. *Eph.* 15:1 (Matt 15:13); 17:19 (Matt 2:2, 9) の2箇所である。

ここでは上記の Massaux と Köhler の判断が一致している箇所を検討の対象とすることとし, 以下に当該箇所それぞれの検証ならびに釈義を試みる。

#### 4.1 Massaux が確実視し Köhler が Probable としている箇所

##### 4.1.1 Ign. *Phld.* 3:1

Ἀπέχεσθε τῶν κακῶν βοτανῶν, ἅτινας οὐ γεωργεῖ Ἰησοῦς Χριστός, διὰ τὸ μὴ εἶναι αὐτοὺς φυτεῖαν πατρὸς· ...

(あなたたちは) イエス・キリストが栽培したのではない, 悪い草から離れていなさい, それらは父が植えたものではないから

##### Matt 15:13

ὁ δὲ ἀποκριθεὶς εἶπεν· πᾶσα φυτεία ἣν οὐκ ἐφύτευσεν ὁ πατήρ μου ὁ οὐράνιος ἐκριζωθήσεται.

彼 (イエス) は答えて言った。わが天の父が植えたのではない全ての植物は抜き去られるであらう。

Massaux<sup>17</sup>は φυτεία とその πατήρ との関係をカギとして, Ign. *Trall.* 11:1ならびに Ign. *Phld.* 3:1への Matt 15:13の影響を指摘している。Köhler<sup>18</sup>も φυτεία が新約文書中ではマタイに特有の語であることから, Ign. *Phld.* 3:1がマタイの句に由来することは確かだとしながらも, マタイの特徴語である οὐράνιος が欠けていることから, イグナティオスがマタイ全体ではなく断片資料を参照している可能性に触れている。

Ign. *Phld.* 3:1における「悪い植物」, すなわち「父の植物ではないもの」とは, Ign. *Phld.* 2:1

<sup>17</sup> Massaux, *Influence*, 88–89.

<sup>18</sup> Köhler, *Rezeption*, 80.

が示す分裂をもたらす悪しき教え（ならびにそのような教えを広める者たち）のことである。一方で、Matt 15:13の「天の私の父が植えなかったすべての植物」はイエスの論敵であるファリサイ派（と律法学者）を指すため、用語とモチーフにおいて共通が見られる。

実際、Matt 15:13はマルコ資料（Mar 7:1-23）の浄・不浄に関する議論への、マタイによる、ファリサイ派批判に結びつけた挿入句である。さらに、4.2.1において後述のように、イグナティオスはこの論敵を「悪しき教え」（Ign. *Phld.* 2:1）をもたらす「信頼できそうな狼」（Ign. *Phld.* 2:2）と呼んで、やはりマタイ参照が考えられる句によって批判している。

よって、Ign. *Phld.* 3:1には Matt 15:13からの引用を確実なものとし、みなすことのできるような構文の一致や用語の著しい一致は見られないが、以上の証拠の積み重ねにより、ここにマタイとの文献的関連を指摘することは可能であると考えられる。

なお、ここでのマタイ参照が意味するものについては4.2.1-2においてより詳しく考察を行う。

#### 4.1.2 Ign. *Smyrn.* 1:1

...(τὸν κύριον ἡμῶν)...βεβαπτισμένον ὑπὸ Ἰωάννου, ἵνα πληρωθῇ πᾶσα δικαιοσύνη ὑπ' αὐτοῦ.  
...(われらの主)...彼によってすべての義が満たされるためにヨハネより洗礼を受けた。

#### Matt 3:15

ἀποκριθεὶς δὲ ὁ Ἰησοῦς εἶπεν πρὸς αὐτόν· ἄφες ἄρτι, οὕτως γὰρ πρέπον ἐστὶν ἡμῖν πληρῶσαι πᾶσαν δικαιοσύνην. τότε ἀφίησιν αὐτόν.<sup>19</sup>

しかしイエスは彼に答えて言った。今はそのようにさせよ、このようにすべての義を満たすのはわれらにふさわしいから。

両者の間で構文や語句の一致そのものは弱い、Massaux<sup>20</sup>は Matt 3:15への参照を疑いもないとしている。πληρῶσαι πᾶσαν δικαιοσύνην は Matt 3:15のみのモチーフであって並行箇所（Mar 1:9-11; Luk 3:21-22）には無いからである。Ign. *Eph.* 18:2ではイエスの受洗の理由が受難によって水を清めるためだと述べられており、文献的依存がないのであれば両箇所間のモチーフの差異に説明がつかないことも Massaux は傍証としている。

Köhler<sup>21</sup>は Ign. *Smyrn.* 1:1-2をケリュグマ的あるいは典礼的定式をイグナティオスがマタイのテキストによって拡張したものだと考え、イグナティオスによるマタイ受容を示す一つの根拠

<sup>19</sup> NA28によれば異読として Sy<sup>s(c)</sup> には Matt 3:15文末に βαπτισθῆναι の付加がみられる。

<sup>20</sup> Massaux, *Influence*, 89.

<sup>21</sup> Köhler, *Rezeption*, 77-79.



としている<sup>22</sup>。

他に John P. Meier<sup>23</sup>もまた、Massaux も挙げる ἵνα πληρωθῇ πᾶσα δικαιοσύνη ὑπ’ αὐτοῦ を、やはり πληρῶσαι πᾶσαν δικαιοσύνην がマタイの編集によるものであることを根拠に<sup>24</sup>、マタイ依拠の証拠としている。そして Ign. *Smyrn.* 1:1-2をイグナティオスのマタイ依拠が最も顕著に表れた箇所だと述べている。ダビデの末裔かつ神の子として処女から生まれ十字架にかけられ、ユダヤ人と異邦人からなる一つの教会のために復活したという描写が、マタイが描くイエス・キリストの物語をなぞっているからである。

この指摘は重要である。Ign. *Smyrn.* 1:1-2がなぞるイエスの物語のうち、「処女降誕」と「十字架での受難」については共観福音書（の一部）に共通するモチーフであり、「ダビデの末裔」と「神の子」についても同様だが、この二つのモチーフは特にマタイ福音書において重要な意味を担ったモチーフだからである。さらに、「全ての義が全うされる」ことも極めてマタイ的なモチーフといえる。また、ユダヤ人と異邦人からなる共同体への指向（εἴτε ἐν Ἰουδαίοις εἴτε ἐν ἔθνεσιν, ἐν ἐνὶ σώματι τῆς ἐκκλησίας αὐτοῦ）はマタイ的な「諸民族宣教」<sup>25</sup>の反映と見ることもできよう（加えて、ここからはイグナティオスが必ずしも「ユダヤ人」を忌避してはいないことを明らかに読み取ることができる）。

以上から、Ign. *Smyrn.* 1:1におけるマタイ福音書の参照は確度が高いと考えられる。

しかし、マタイとイグナティオスがそれぞれ「義」（δικαιοσύνη）あるいは「すべての義を満たす」（πληρῶν πᾶσαν δικαιοσύνην）の内容をどのように捉えているかについては、比較検討する必要がある。BDAG<sup>26</sup>は δικαιοσύνη の語義に「言葉によって示されているわけではない神の期待に応えるような特定の行動」という意味での「正しさ」を挙げ、まさに Matt 3:15=Ign. *Smyrn.* 1:1をその例としているが、このような（マタイとイグナティオスの δικαιοσύνη 理解は内

<sup>22</sup> Köhler は Ign. *Eph.* 18:2をイグナティウスがイエスの洗礼に自身の解釈を施していることを示す例だと指摘しており、イグナティウスは伝承された定式を単に受け入れるのではなく、自らの目的に合わせて改変していることをこの例が示していると述べている。

<sup>23</sup> John P. Meier, “Matthew and Ignatius: A Response to William R. Schoedel,” in *Social History of the Matthean Community*, ed. David L. Balch (Minneapolis: Fortress, 1991), 180–82.

<sup>24</sup> Matt 3:14–15について、マタイの編集が口伝に遡る可能性については Luz, *Matthew* 1–7, 140（ルツ『マタイ（I/1）』209頁）が指摘している。言語上の根拠（linguistic grounds）からは決定できないとしながらも、Luz は少なくとも15節はマタイに由来すると結論づけている。いずれにせよ、マタイ独自の句である以上、マタイの編集意図が反映されているという判断が妥当であろう。

<sup>25</sup> 澤村『福音書記者マタイの正体』87–90, 111–130頁。

<sup>26</sup> BDAG (= Frederick W. Danker, Walter Bauer, William F. Arndt, and F. Wilbur Gingrich, “δικαιοσύνη,” *Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*. 3rd ed.) (Chicago: University of Chicago Press, 2000), 248.

容において一致しているという)理解は正しいであろうか。

まず、マタイの δικαιοσύνη 理解に関して Davies and Allison<sup>27</sup>は, πληρῶσαι πᾶσαν δικαιοσύνην について解釈史上の七つの類型を参照したうえで, δικαιοσύνη についてはマタイにおいて (Matt 5:6を除き) 一貫して神の意志に沿う道徳的なふるまい (moral conduct) を意味しているとする。イエスがそのようにふるまうことで, 預言に示された神の意志を成就することを, 当該箇所「すべての義を満たす」は意味しているというのである。一方で Davies and Allison は, Oscar Cullman<sup>28</sup>らによる, イエスの洗礼はその死の予型であり, その死により義を達成することで全ての (人に罪の) 許しを与えることを意味するという解釈に対しては, パウロの思想を持ち込むことでしかないと批判している<sup>29</sup>。

Matthias Konrad<sup>30</sup>も同様に, マタイの「義」はパウロのように救いやその秩序を意味してはいないと述べている。そして, マタイにとっての「義」は, 神との関係に応答するふるまいのことであり, それは Matt 5:17に明らかなように, 神の意志があらわされた律法と預言者の成就であり, イエスの解釈に基づく律法と預言者の遵守こそ, より優れた義の達成 (Matt 5:20) のための基底であると指摘している。

John Nolland<sup>31</sup>もまた, ここでの「義」を, 「神との正しい関係へと回復され, 具体的な (tangible) 生活上の正しさとして遂行されるもの」と定義づけている。

Hubert Frankemölle<sup>32</sup>は, この時点では δικαιοσύνη の指示内容は読者に対して未決のままであり, 福音書の中でイエスの教えと行いを通して示されていくものであると述べている。そして, Matt 1:19へと遡り, ヨセフの義がマリアと離縁するという「正しい」行為ではなく, むしろそれを乗り越えることによって達成されたことに「よりよい義」(Matt 5:20) のあり方が示されていると指摘している。

マタイにおける δικαιοσύνη も πληρῶ ともにマタイの特徴語<sup>33</sup>であり, Matt 3:15におけるこれらの組み合わせは「義」についてのマタイの理解を読者に提示あるいは暗示しているといえよ

<sup>27</sup> William D. Davies and Dale C. Allison, Jr., *The Gospel according to Saint Matthew*, ICC (Edinburgh: T&T Clark, 1988). Three Volumes: I, 325–27.

<sup>28</sup> Oscar Culmann, *Baptism in the New Testament*, trans. by J. K. S. Reid (London: SCM Press, 1950), 18–20.

<sup>29</sup> 他に Robert H. Gundry, *A Commentary on His Handbook for a Mixed Church under Persecution*, 2<sup>nd</sup> ed. (Grand Rapids, MI: W. B. Eerdmans, 1994), 51 「イエスによって信者の義がすべて回復されることを意味しているという解釈は, パウロ的な信仰義認を不当にあてはめることにすぎない。」

<sup>30</sup> Matthias Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, NTD1 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2015), 51–52.

<sup>31</sup> John Nolland, *The Gospel of Matthew: a commentary on the Greek text*, NIGTC (Grand Rapids, MI / Cambridge, U.K.: W.B. Eerdmans Pub. Co., Bletchley, U. K.: Paternoster Press, 2005), 154.

<sup>32</sup> Hubert Frankemölle, *Matthäus: Kommentar* 1 of 2vols. (Düsseldorf: Patmos Verlag, 1994), 185.

<sup>33</sup> Luz, *Matthew*, 28, 35 (ルツ『マタイ (I/1)』48, 58–59頁)。

う。すなわちそれは、イエス・キリストの解釈に基づく律法の完全な遵守によって達成される、神の意志の実現であり、パウロが志向する δικαιοσύνη とは本質的に異なる内容を持つ。

では、イグナティオスは「義」をどのように理解しているであろうか。イグナティオスの手紙において δικαι- 語群は δικαία (Ign. *Eph.* 1:1) ; δικαίως (Ign. *Eph.* 15:3; Ign. *Magn.* 9:2); ὁ δίκαιος (Ign. *Magn.* 12:1); δικαιοῶ (Ign. *Rom.* 5:1 (δεδικαίωμαι); Ign. *Phld.* 8:2 (δικαιοθῆναι)); πᾶσα δικαιοσύνη (Ign. *Smyrn.* 1:1), 計7箇所の用例が挙げられる。

このうち、δικαίως (Ign. *Eph.* 15:3; Ign. *Magn.* 9:2) は一般的な意味での正しさを意味すると考えられる<sup>34</sup>。また、ὁ δίκαιος (Ign. *Magn.* 12:1) は Prov 18:17 LXX の引用であり、謙遜という姿勢が一般的な意味での正しさを証明する要素であることを述べている箇所である。

イグナティオスの δικαιοσύνη 理解をより明確に示しているのは、Ign. *Rom.* 5:1および Ign. *Phld.* 8:2の動詞形 δικαιοῶ と、Ign. *Eph.* 1:1における「義の性質」(φύσις δικαία) であろう。BDAG は、δικαιοῶ を「正当性を与えること」と定義<sup>35</sup>し、中でも、人が神によって対価なしに正しいと認められるという意味での「正当性を与えること」の例として、律法 (νόμος) を判断基準とせずにキリストにおける信実 (faith) を通して神の賜物として義人 (δίκαιος) となることについて述べているロマ、I コリ、ガラ、フィリなどのパウロ書簡の箇所を例に挙げ、その関連で Ign. *Rom.* 5:1と Ign. *Phld.* 8:2を例示に加えている。実際に Ign. *Rom.* 5:1は I Cor 4:4への参照が考えられ<sup>36</sup>、Ign. *Phld.* 8:2でイグナティオスは、イエスの十字架と死そして復活、またイエスによってもたらされる信実という、「触れがたい古証拠」(τὰ ἄθικτα ἀρχεῖα) により、またフィラデルフィアの信徒たちの祈りによって義とされることを願うと述べており、ここにはパウロ的な義の理解への著しい接近を見て取ることができる。

さらに、Ign. *Eph.* 1:1における「義の性質」(φύσις δικαία) は、「我らの救い主イエス・キリストにおける信実と愛」と等しいものとされており、やはりパウロ的な理解への近さを見て取ることができる。

以上において確認したように、イグナティオスはマタイのイエスの物語の枠組みを受け入れており、なおかつ、「義を満たす」というマタイにおいて中心的な表現を受け入れていながら、一方では「義」そのものの理解においてはマタイとは著しく異なり、むしろパウロの「義」理解に接近していると結論づけることができる。

<sup>34</sup> “δικαίως” 2, BDAG, 250, “Correctly, justly, uprightly”

<sup>35</sup> “δικαιοῶ” 2-b-β, BDAG, 249.

<sup>36</sup> BDAG, 49; Massaux, *Influence*, 111.

## 4.2 Köhler が Quite Possible としている箇所

### 4.2.1 Ign. Phld. 2:2

πολλοὶ γὰρ λύκοι ἀξιόπιστοι ἡδονῇ κακῇ αἰχμαλωτίζουσιν τοὺς θεοδόρους· ἀλλ' ἐν τῇ ἐνότητι ὑμῶν οὐχ ἔξουσιν τόπον.

なぜなら多くの信用できそうな狼が悪い喜びのために神の走者をつかまえるからだ。しかしあなたがたの一致の中には彼らは機会をもたない。

### Matt 7:15

Προσέχετε ἀπὸ τῶν ψευδοπροφητῶν, οἵτινες ἔρχονται πρὸς ὑμᾶς ἐν ἐνδύμασιν προβάτων, ἔσωθεν δὲ εἰσιν λύκοι ἄρπαγες.

偽預言者に注意せよ、〔彼らは〕羊の衣であなたがたへと来るが、内側は貪欲な狼である

Massaux<sup>37</sup>は、誘惑者である狼というモチーフは Ign. Phld. 2:2 と Matt 7:15 に共通しており、Ign. Phld. 2:1 における羊との対比と合わせてマタイに由来するという。しかし、Köhler<sup>38</sup>は狼の比喩は初期キリスト教文獻に広く見られるものであり、必ずしもマタイ由来を確証するものではないと述べている。

Matt 7:15 を含むベリコーベ (7:15–20) は、偽預言者たちを警戒せよという警告の句で始まり、預言者をその結ぶ実で見分けることを示すイエスの言葉である。Ign. Phld. 2:2 のみに限ればマタイへの依存を確定的に示す要素は無いともいえるが、論敵への批判というモチーフの一致や Massaux が指摘する「羊」の共通などはマタイ由来を判断する材料となるであろう。

Ign. Phld. 2:1–3:1 に示される「分裂」(μερισμός) と「悪い教え」(κακοδιδασκαλία) への警戒は、教会や聖餐の一致 (ἡ ἐνότης) と、その一致が単一の監督を中心とするべきであるという主張 (Ign. Phld. 3:2; 4:1) につながっていく。

### 4.2.2 Ign. Eph. 5:2

...εἰ γὰρ ἐνός καὶ δευτέρου προσευχῆ τοσαύτην ἰσχὺν ἔχει, πόσῳ μᾶλλον ἢ τε τοῦ ἐπισκόπου καὶ πάσης τῆς ἐκκλησίας;

...それゆえもし一人また二人の祈りがあれほどの力を持つのであれば、監督と全ての教会のそれ (祈り) はどれほどだろうか？

<sup>37</sup> Massaux, *Influence*, 86–87.

<sup>38</sup> Köhler, *Rezeption*, 84.

Matt 18:19

<sup>19</sup> Πάλιν [ἀμὴν] <sup>39</sup>λέγω ὑμῖν ὅτι ἐὰν δύο συμφωνήσωσιν ἐξ ὑμῶν ἐπὶ τῆς γῆς περὶ παντὸς πράγματος οὗ ἐὰν αἰτήσωνται, γενήσεται αὐτοῖς παρὰ τοῦ πατρὸς μου τοῦ ἐν οὐρανοῖς. <sup>20</sup>οὗ γάρ εἰσιν δύο ἢ τρεῖς συνηγμένοι εἰς τὸ ἐμὸν ὄνομα, ἐκεῖ εἰμι ἐν μέσῳ αὐτῶν.

<sup>19</sup>また「確かに」あなたがたに言う、あなたがたのうち二人が求めるとどんな願いについてであれ地上で同意するなら、天のわが父によって彼らに起こる。<sup>20</sup>なぜなら二人または三人が私の名において集まるところでは、そこに私も彼らの中にいるからだ。

Köhler<sup>40</sup>は、Matt 18:19の「二人が一致」して求めることと、Ign. Eph.5:2の「一人また二人」の祈りの相違から、マタイのテキストが念頭にあったことは言えるとしても、直接の参照関係にはないと述べているが、Massaux<sup>41</sup>は「一人また二人の祈り」(ἐνὸς καὶ δευτέρου προσευχή)が持つ力を、「あれほどの」(τοσαύτην)という指示形容詞によって説明していることから、Matt 18:19の「二人が一致して求める」祈りの力についてのイエスの言葉をイグナティオスと読者がともに知っていることが前提とされていると論じている。

加えて、マタイのイエスの言葉とイグナティオスの言葉は、「教会」(ἐκκλησία)を巡る議論の一部である点で共通していることから、マタイ由来の可能性は高いと見て良いのではないか。そして、Massauxが主張するように「あのような」(τοσαύτην)がMatt 18:19を参照しているのであれば、Ign. Eph. 5:2は福音書の記述を自身の主張の根拠にするという、福音書の権威化の萌芽が見られる箇所であるといえる<sup>42</sup>。イグナティオスはここで、マタイにおける教会が持つ権限についての議論を、監督の権威を確立しようとする自身の主張(Ign. Eph. 3:2-6:1)へと結びつけている。

4.2.3 Ign. Pol. 1:2; 3:2

<sup>1:2</sup>... πάντας βάσταζε, ὡς καὶ σὲ ὁ κύριος· πάντων ἀνέχου ἐν ἀγάπῃ, ὥσπερ καὶ ποιεῖς.

<sup>1:2</sup>...全て(の人)を担え、主があなたを「担ってくださった」と同様に。全て(の人)を愛において耐えよ、あなたが「今」しているように。

<sup>1:3</sup>... πάντων τὰς νόσους βάσταζε, ὡς τέλειος ἀθλητής·

<sup>39</sup> 19節の異読について、N WΔ pc sy<sup>h</sup>は冒頭のΠάλινの後にδεを付加。ἀμὴνを含まないのはX D L Γ f<sup>1</sup> 579. 892 al lat sy<sup>p</sup> bo, 含むのはB(Θ)058 078 f<sup>13</sup> 33 æl it sy<sup>s.c</sup> sa mae bo<sup>ms</sup>。

<sup>40</sup> Köhler, *Rezeption*, 80–81.

<sup>41</sup> Massaux, *Influence*, 87.

<sup>42</sup> マタイは一方で「祈り」(προσευχή)は隠れたところで孤独になすべきものというイエスの教えを記している(Matt 6:5–6)。

<sup>1:3</sup> ...全て（の人）の病を担え、全き競技者のように。

#### Matt 8:17

ὅπως πληρωθῇ τὸ ῥηθὲν διὰ Ἡσαΐου τοῦ προφήτου λέγοντος·

αὐτὸς τὰς ἀσθενείας ἡμῶν ἔλαβεν καὶ τὰς νόσους ἐβάστασεν.

預言者イザヤを通して言われていたことが満たされるために。

「彼はわれらの病弱を負い、疾病を担った。」

Matt 8:17のイザヤ引用（Isa 53:4）は、LXXとは語彙が一致しない。一方でマタイとイグナティオスは一致している。それゆえ Massaux<sup>43</sup>は（マタイとイグナティオスが共通の旧約テクストを参照している可能性は除外できないとしながらも）、イグナティオスによるマタイ引用（conscious attention and literary contact）を主張している。Köhler<sup>44</sup>は、この一致を、初期キリスト教において Isa 53が広く知られていたことに求め、マタイへの文献的依存と、マタイとイグナティオスが共通の資料から「引用」していることとは、可能性において同程度であると主張する。

#### 4.2.4 Ign. Pol. 2:2

φρόνιμος γίνου ὡς ὁ ὄφεις ἐν ἅπασιν καὶ ἀκέραιος εἰς αἰὶ ὡς ἡ περιστέρα.

全てにおいて蛇のように賢くそして常に鳩のように無垢であれ

#### Matt 10:16

γίνεσθε οὗν φρόνιμοι ὡς οἱ ὄφεις καὶ ἀκέραιοι ὡς αἱ περιστεραί.

そこで蛇のように賢くそして鳩のように無垢であれ

Massaux<sup>45</sup>は、新約全体でも蛇のように賢くなることと鳩のように純真になることを対置する比喩はマタイにのみ見られること、加えて、複数形の構文を宛先であるポリュカルポス個人に合わせて単数にし、「全てにおいて」（ἐν ἅπασιν）と「常に」（εἰς αἰὶ）という強調を加えている以外はマタイ版との相違がないことから、確度は高いものとしている。Köhler<sup>46</sup>もマタイ本文とイグナティオスの相違を、イグナティオスが宛先の状況に合わせてなした加筆修正として説

<sup>43</sup> Massaux, *Influence*, 90.

<sup>44</sup> Köhler, *Rezeption*, 85–86.

<sup>45</sup> Massaux, *Influence*, 90–91.

<sup>46</sup> Köhler, *Rezeption*, 86.



明できると述べるが、ここでもマタイ参照か共通伝承かは決定できないとしている。

以上、本項で検討した箇所には、それぞれ単独ではイグナティオスのマタイ参照を決定づける要素を見出すことはできないが、傍証として数えることはできよう。

#### 4.3 Massaux がやや確実 (Probable) とし Köhler がやや確度が劣る (Quite Possible) とする箇所

##### 4.3.1 Ign. Eph. 17:1

Διὰ τοῦτο μύρον ἔλαβεν ἐπὶ τῆς κεφαλῆς αὐτοῦ ὁ κύριος, ἵνα πνέῃ τῇ ἐκκλησίᾳ ἀφθαρσίαν....

これにより主はその頭に油を受けた、教会に不死を吹き込むために

##### Matt 26:7

προσηλθεν αὐτῷ γυνὴ ἔχουσα ἀλάβαστρον μύρου βαρυτίμου καὶ κατέχευεν ἐπὶ τῆς κεφαλῆς<sup>47</sup> αὐτοῦ ἀνακειμένου.

高価な油の壺をもった女性が彼のほうに来て座っている彼の頭に注いだ。

Massaux<sup>48</sup>は、Ign. Eph. 17:1を Matt 26:6-13; Mar 14:3-9; Luk 7:36-50; Joh 12:1-8に記された出来事と関連付けているが、ルカとヨハネではイエスが香油を受けたのは足であり、これらは検討から除外されれるとする（ただし、ヨハネにおける、「香油の香りが家を満たした」ことと、イグナティオスの「教会に不滅（性）を吹き付けた」ことの関連は考慮する余地があるとしている）。マルコではなくマタイ由来とすることについては τῆς κεφαλῆς に対する前置詞 ἐπὶ の有無によって判断しているという。

Köhler<sup>49</sup>もまた、イエスが頭に香油を受けるという記述はマタイとマルコに由来しているとし、語彙などはマタイに最も近いと認めているが、由来の確証とまではいえないという。イグナティオスが ἵνα πνέῃ τῇ ἐκκλησίᾳ ἀφθαρσίαν という、マタイ福音書の内容を飛び越える解釈を施しているためである。

##### 4.3.2 Ign. Phld. 6:1

Ἐὰν δέ τις ἰουδαϊσμόν ἐρμηνεύῃ ὑμῖν, μὴ ἀκούετε αὐτοῦ. ἄμεινον γάρ ἐστιν παρὰ ἀδρόσ περιτομὴν ἔχοντος χριστιανισμόν ἀκούειν, ἢ παρὰ ἀκροβύστου ἰουδαϊσμόν. ἐὰν δὲ ἀμφοτέροι περι Ἰησοῦ Χριστοῦ

<sup>47</sup> ἐπὶ τῆς κεφαλῆς は 8 B D Θ 0293 f<sup>1.13</sup> 700 pc; ἐπὶ τὴν κεφαλὴν は 45 A L W 33 41.

<sup>48</sup> Massaux, *Influence*, 91.

<sup>49</sup> Köhler, *Rezeption*, 82.

μη λαλῶσιν, οὗτοι ἐμοὶ στήλαι εἰσιν καὶ τάφοι νεκρῶν, ἐφ' οἷς γέγραπται μόνον ὀνόματα ἀνθρώπων.

もし誰かがユダイズムをあなたに解釈して聞かせたなら、その人〔の言うこと〕を聞くな。割礼のある人からクリスティアニズムを聞くほうが無割礼〔の人〕からユダイズムを聞くよりも良い。そしてもし両者ともがイエス・キリストについて語らないのであれば、それらは私にとって、その上にただ人々の名前が彫ってあるような墓石と死人の墓である。

#### Matt 23:27

Οὐαὶ ὑμῖν, γραμματεῖς καὶ Φαρισαῖοι ὑποκριταί, ὅτι παρομοιάζετε τάφοις κεκονιαμένοις, οἳτινες ἐξωθεν μὲν φαίνονται ὡραῖοι, ἔσωθεν δὲ γέμουσιν ὀστέων νεκρῶν καὶ πάσης ἀκαθαρσίας.

災いあれお前たちに、律法学者たちとファリサイ派たち偽善者どもよ、なぜならお前たちは白塗りした墓に似ているからだ、それらは一方で外側は美しく輝くが、内側は死者の骨とあらゆる汚れていっばいだ。

Massaux<sup>50</sup>は、Matt 23:27と Ign. *Phld.* 6:1には τάφος と νεκρός の二語しか共通していないことを認めつつ、「ユダヤ教批判」というモチーフから、イグナティオスの念頭にマタイの句があったと想定している。

Köhler<sup>51</sup>は、Matt 23:27と Ign. *Phld.* 6:1とは、人を墓にたとえることで共通しており、このような比喩はマタイにのみ見られると指摘している。とくに τάφος (墓) の語は、(福音書中) マタイにしか現れない (他に Rom 3:13)。しかし、Köster<sup>52</sup>が正しく指摘しているように両者の力点は異なる。イグナティオスは論敵を墓すなわち死んだ者になぞらえるが、マタイ (のイエス) は、墓の内側と外側の対比に力点がある。Köster はそれゆえにマタイ依存を否定するが、Köhler はマタイの墓の比喩をイグナティオスが独自の解釈を施して用いたことは考えられるとしている。

4.1.1で既に検討した Ign. *Phld.* 3:1でもイグナティオスはマタイの (イエスによる) 律法学者とファリサイ派批判を、自身の論敵への批判として用いている。特に、Ign. *Phld.* 6:1ではその批判の対象は ιουδαϊσμός と名指しされており、イグナティオス (および手紙の受け手) が立つ

χριστιανισμός と対置されている。しかしこれを Massaux のように単純に「ユダヤ教」批判と理解することが妥当であるかどうかは検討する必要がある。また、4.1.2で扱った Ign. *Smyrn.* 1:1

<sup>50</sup> Massaux, *Influence*, 93–94.

<sup>51</sup> Köhler, *Rezeption*, 84–85.

<sup>52</sup> Köster, *Überlieferung*, 36f.

に明かなように、イグナティオスが「ユダヤ人」を敵視しているわけではないことは重要である。

イグナティオスにおける *ιουδαϊσμός* と *χριστιανισμός* については、稿を改めて詳しく取り扱う。

#### 4.3.3 Ign. *Smyrn.* 6:1

ὁ χωρῶν χωρεῖτω.

受け入れる者は受け入れよ。

#### Matt 19:12

ὁ δυνάμενος χωρεῖν χωρεῖτω.

受け入れることのできる者は受け入れよ。

Massaux<sup>53</sup>は、理解が困難な奥義についての主張という点において相似が見られるが、両者が示す奥義の内容が異なっているために、文献的依存を立証することは困難であることを認めている。一方で Köhler<sup>54</sup>は *χωρεῖν* という語の用法がイグナティオスの通常の使い方とは意味が異なっているため、マタイ由来を考えることは可能であると述べている。

マタイはマルコ (Mar 10:1–2) に由来する離縁についての教えの末尾に、独身についての独自の教えを付加しており、その結びにこの句を置いている。イグナティオスが「受け入れる」ことの内容としているのは、直接的には「キリストの血に信を置かない者には（何者であれ）裁きがそこにある」(ἐὰν μὴ πιστεύσωσιν εἰς τὸ αἷμα Χριστοῦ, κακέινους κρίσις ἐστίν) ことであって、その者どもとは、直前の文脈（特に Ign. *Smyrn.* 2:2–5:3）から、いわゆる仮現論者のことだと判断される。このようにマタイとイグナティオスでは表現が一致している一方で、その内容には相当に隔たりがある。

以上、本項で検討した箇所では、イグナティオスのマタイ参照を示す要素はあるものの、積義的な問題があり、積極的な証拠として用いることには課題があると言わざるを得ない。

## 5. 結 論

以上、イグナティオスの手紙にマタイ福音書からの文献的引用を示唆する箇所について、検証と積義的比較を行った。

<sup>53</sup> Massaux, *Influence*, 94.

<sup>54</sup> Köhler, *Rezeption*, 86–87.

4.2で扱った4組の箇所には、イグナティオスのマタイ参照を決定づける強い証拠とまではいえないものの、キーワードやモチーフや文脈における複数の一致を見出すことができた。ただし、これらの要素のみであれば Köster らが主張するような口頭伝承への還元を想定することも可能といえよう。

しかし、4.1で扱った Ign. *Phld.* 3:1と Matt 15:13および Ign. *Smyrn.* 1:1と Matt 3:15からは、イグナティオスがマタイ福音書を文献的に知っており、参照していることを示す要素が見出された。とくに両者においてマタイの箇所が編集に属すること、そして後者においてマタイの鍵語「すべての義を満たす」が共通することは、イグナティオスのマタイ参照を示す重要な要素である。さらに後者の文脈である Ign. *Smyrn.* 1:1-2はマタイ福音書全体の枠組みを物語的に、またモチーフ的になぞっていることは、イグナティオスがマタイの断片資料ではなく福音書そのものを知っていたことを示していると考えられる。

そして、イグナティオスがマタイを参照する箇所の多くは、「ユダヤ教」批判や、監督の権威の確立など、イグナティオスの重要な思想に関わりがあることも観察された。

一方で、イグナティオスはマタイ福音書の神学理解を踏襲しているとは言えない。中でも「義」理解における隔たりは大きく、イグナティオスはこの点ではむしろパウロに近いことも明らかになった。

以上に見るような、マタイとイグナティオスの「近さ」と「隔たり」は、何を意味しているのか。あるいは何に由来するのか。この問題については稿を改め、両者の地理的、歴史的、社会的背景をもとに詳しく考察したい。

【別表】 イグナティオスによるマタイ参照箇所一覧

Ignatius	Massaux		Köhler		Biblia Pastrica		Bibindex	
	*数字はMassauxのセクション * ?はMassauxがdoubtfulとしている箇所		* K-probはKöhlerがprobableとしている箇所。 K-qpはquite possible, K-tpはtheoretically possible, K-implはimprobable。 * Xは該当箇所がないことを示す。 * ←はMassauxと同じ箇所を示す。		* foundはBPにおける参照があることを示す。 * ←はMassauxと同じ箇所を示す。 * Ign. Rom. 6:1はBellinzoniはBiblia Pastricaの一覧に挙げていない (おそらく見落とし?)。		* foundはBibindexにおける参照があることを示す。 * differentはBPとは異なる箇所が参照されていることを示す。 * ←はMassauxと同じ箇所を示す。	
Mg. 8:2	Mt. 5:11-12	1-1	K-imp	X	--	--	different	Joh 8:29
Philad. 2:2	Mt. 7:15	1-2	K-qp	←	found	Philad. 2:1	different	1Co 9:24-25 =Philad.2:2
Ephes. 5:2	Mt. 18:19-20	2-1	K-qp	←	found	Mt. 18:19	found	Mt. 18:19
Ephes. 14:2	Mt. 12:33	2-2	K-imp	X	found	←	--	--
Trall. 11:1	Mt. 15:13	2-3	--	--	found	←	found	←
Philad. 3:1	Mt. 15:13	2-4	K-prob	←	found	←	found	←
Smyrn. 1:1	Mt. 3:15	2-5	K-prob	←	found	←	found	←
Polyc. 1:2-3	Mt. 8:17	2-6	K-qp	←	--	--	--	--
Polyc. 2:2	Mt. 10:16	2-7	K-qp	←	found	←	found	←
Ephes. 17:1	Mt. 26:6-13	3-1	K-qp	←	--	--	found	Mat. 26:7
Mg. 9:1	Mt. 27:52	3-2	K-imp	X	--	--	found	Mat. 27:52 =Mg. 9:2
Rom. 9:3	Mt. 10:40-41	3-3	K-tp	Mt. 10:41-42; 18:5	--	--	--	--
Philad. 6:1	Mt. 23:27	3-4	K-qp	←	found	←	found	←
Smyrn. 6:1	Mt. 19:12	3-5	K-qp	←	found	←	found	←
Ephes. 6:1	(? Mt. 10:40; 21:33-46)	4-1	K-tp	Mt. 10:40; 21:33-41	found	Mt. 10:40; 21:33-41	different	Luk 12:42
Philad. 7:2	(? Mt. 16:17)	4-2	K-tp	Mt. 16:17	found	Mt. 16:17	found	Mt. 16:17
Ephes. 15:1	--	--	K-qp	Mt. 15:13	--	--	different	Psa 148:5
Ephes. 17:19	--	--	K-qp	Mt. 2:2, 9	--	--	--	--
Ephes. 10:3	--	--	K-tp	Mt. 13:25	--	--	different	1Ti 5:2
Ephes. 11:1	--	--	K-tp	Mt. 3:7b	found	Mt. 3:7	different	Luk 3:7
Ephes. 16:2	--	--	K-tp	Mt. 3:12	--	--	different	Mar 9:43
Mg. 5:2	--	--	K-tp	Mt. 22:19	--	--	--	--
Smyr. Sal.	--	--	K-tp	Mt. 12:18	found	Mt. 12:18	--	--
Smyr. 6:2	--	--	K-tp	Mt. 6:28	--	--	--	--
Trall. 9:1	--	--	K-tp	Mt. 11:19	--	--	--	--
Polyc. 1:1	--	--	--	--	found	Mt. 7:25	found	Mt. 7:25
Polyc. 1:3	--	--	--	--	found	Mt. 8:17	--	--
Rom. 6:1	--	--	--	--	??	?? *BP1 p.99L20	found	Mt. 16:26

\* 赤字は今回検討を行った箇所。

作成者： 澤村雅史(2021.3.3)